

シニアライフアドバイザー 望月 亘朗

### 午睡を邪魔された旧友の編集員からの電話

例年になく寒暖差の激しい4月上旬のある日、咲き誇る桜花を、羨むかのような早朝からの雨。

いつも通り、朝の行事を終え、次は散歩だと外に出たものの、花散らしの冷雨に出鼻を挫かれ「ちょっと早い習慣の昼寝を」とベッドに潜り込んだ矢先に、電話のベル。「誰だ！独居老人の午睡を邪魔する奴は！」と、ふて腐れながら受話器をとると驚いたことに、声の主はビバシニア編集長の山下由喜子女史でした。

「暫く～、元気ですか～」と、昔どおりの若々しい声、「ビバシニア」がまだ「会報」と呼ばれていた頃の、編集長の声と容姿が一瞬にして蘇り、「ア～ハイ、ハイどうにか」と、初恋の相手へのような、ウブな返事。かつて、神奈川の会報「いんふぉー」編集委員として共に取り組んだ頃の、甘酔っぱい気分が蘇ったのです。

「本、読んだわヨ、中身もマーマーだけど、ペンネームが面白いネ、についてはビバシニアの個人活動紹介欄に掲載したいので、何か一筆書いてヨ、原稿依頼が届いていなかったようで、締め切りが過ぎているけれど、4～5日は待ってあげる」と、相変わらずの上から目線。

「マ！仕方ないか、「ビバシニア」を立派に育て挙げた張本人からの、直々の申し出なのだから、従わざるを得まい」と、複雑な気持ちを抑えながら、思いのままをしたためにしました。

### ペンネーム「七部残康」の由来

今年2月に自費出版した「認知症予防に励む老人達の物語」のペンネーム「七部残康」(ナナブザンコウ)と読む名前は、あまり類例のない珍名です。一字一句は馴染みの字だから、素直に読めば、七部も健康が残っているのか、結構なことではないかと、理解してもらえらるだろうと付けた名で、由来などないのです。

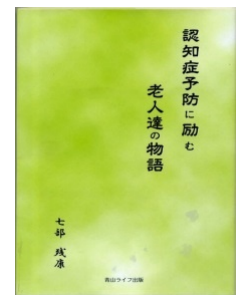
ただ強いて言えば、後期高齢者になった年の春に「大腸がん」の切断手術を受け、翌々年に「左腎臓がん」の摘出手術、その翌々年には白内障と

前立腺肥大の手術を受けて、満身創痍の体になってしまい、これはフィクションではない事実です。だが虚勢を張って、まだ七部も健康が残っているぞ、高齢者扱いはご免だと、意気込んで付けた名前なのです。

実は、私の本名も珍名の部類に属していて、月給の口座振り込みが始まった頃から、名前の「亘」が常用漢字に無かったために、「亘朗」をギロウと読む人はゼロで苦労した記憶が強のですが、病院や銀行の窓口などでは、今でも恥ずかしい思いをしています。

### 物語(中身)の構成とその概略

本の構成は、合わせて二部になっています。第一話は、運転免許証更新用の高齢者講習会で、「認知機能検査」の際に、偶然、隣席に座った人と、気軽な話し合いがキッカケになって、友人としての交流が始まります。やがて認知症の恐ろしさに話しがおよび、認知症の予防に取り組もうとする仲間も増え、グループとなって「抗認知症アクションプログラム」と称する目標を自作します。月1回の定例会などで、目標の達成状況、改善点、会の維持発展などを話し合い、時には割り勘で焼鳥屋の暖簾をくぐり、楽しみながら認知症の予防に励んでいる老人達の物語です。



第二話は、私の生まれ育った山間集落での話で、今も残る私の生家(無住)に、小学校時代の悪童仲間数人とともに、2泊3日で滞在します。山菜狩りや集落発生の起源を探して集落跡を探訪し、集落の規模に不似合とも思える神社仏閣の佇まいに驚き、集落唯一の特産品とも言える蝮酒に酔い、わずかに残る集落の住人とも交流して、元気を分かち合った様を書いた物語です。

フィクション部分が6割弱の話ですが、本の売れ行きは好調で、残り数冊とのことです。(アマゾン書店調べ)